

# Empirical Study of Multidimensional Poverty and Well-being: Evidence from Japan

王, 璋

<https://doi.org/10.15017/1866250>

---

出版情報 : 九州大学, 2017, 博士 (経済学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

氏名	Wang Wei (王 ウェイ)		
論文名	Empirical Study of Multidimensional Poverty and Well-being: Evidence from Japan (日本における多次元の貧困と厚生に関する実証研究)		
論文調査委員	主査	九州大学	准教授 浦川 邦夫
	副査	九州大学	准教授 橋本 由紀
	副査	九州大学	准教授 宮崎 毅

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、所得、生活時間、社会関係など複数の次元からなる貧困指標を日本の大規模な個票データを用いて構築し、多次元の貧困がどのような社会経済要因から生じ、人々の主観的厚生（幸福感や健康感）にどのような影響を及ぼすかについて実証分析を行うものである。従来の貧困研究は、所得などの金銭的指標のみで貧困の実態を検証するケースが多数であるが、本研究では、それらに加え、余暇時間の多寡や家族・地域との社会的なつながりの程度を考慮した貧困指標を構築し、貧困をより多面的な視点から検討している点に特徴がある。

論文は六章で構成される。一章ではグローバル化の進展のもとでの日本と諸外国の貧困指標の推移と多次元貧困指標についての包括的なサーベイがなされている。二章ではAlkire and Foster (2011)らが開発した貧困の計測法に基づき、所得、生活時間、社会関係から捉える多次元の貧困状況が、人々の主観的厚生に対してどのように関連しているかを日本の個票パネルデータを用いて検証している。結果として、多次元の貧困は、一次元のみ貧困の状態よりも健康に対して負の影響が大きくなることを示している。三章では所得や時間の貧困を世帯ごとに定義し、これらの貧困が余暇活動や健康に関係する諸活動に与える影響について操作変数法で検証している。そして、所得と時間が同時に貧困である世帯では、運動等の余暇活動が制限される点を示している。四章ではMerz and Rathjen (2014)が提唱した「補償アプローチ」に基づく貧困の推計により、これまで見過ごされてきた「生活時間の不足を原因とする貧困層」の抽出が行われている。分析結果によると、従来の所得貧困の推定では、単身世帯やひとり親世帯の貧困が高めに推計されやすく、夫婦がともにフルタイム就労している世帯の貧困がやや低めに推計されやすいことが示されている。五章では高等教育が所得貧困や多次元貧困に陥るリスクの削減に実際にどの程度の効果があるかについて、傾向スコア・マッチング法を用いた分析が行われている。結果として、男女とも高等教育に貧困削減効果はあるものの、女性は男性に比べてその効果が小さいことが示されている。六章では本論文の主要な結論と政策提言がまとめられている。

論文調査委員による調査の結果、本論文は個票データを用いた計量分析に基づいて日本の公共政策に対する一定の政策的含意を導いており、学位論文として必要な水準に達している点が確認された。以上の点を踏まえ、本論文調査会はWei Wang氏から提出された論文「Empirical Study of Multidimensional Poverty and Well-being: Evidence from Japan」を博士（経済学）の学位を授与するに値するものと認める。